

薬剤師病棟配置で進める質の高い薬物療法

～医療法人 橘会 東住吉森本病院薬剤科における活動事例～

2012年度の診療報酬改定で設けられた「病棟薬剤業務実施加算」では、全病棟への専任薬剤師の配置と、週20時間以上の病棟業務の実施が算定条件とされています。東住吉森本病院薬剤科は、1995年から全病棟に薬剤師を配置し、病棟業務を行ってきました。その取組みは高く評価され、厚生労働省が2011年に作成した「チーム医療推進のための基本的考え方と実践的事例集」でもモデル例として紹介されています。いかにして質の高い病棟業務を行っているのか、薬剤科科長の野村剛久先生、同主任の黒沢秀夫先生、薬剤師の佐古守人先生に伺いました。

I 不在日のない 薬剤師病棟常駐体制

若手の主担当2名を 経験をつんだ副担当がフォローする

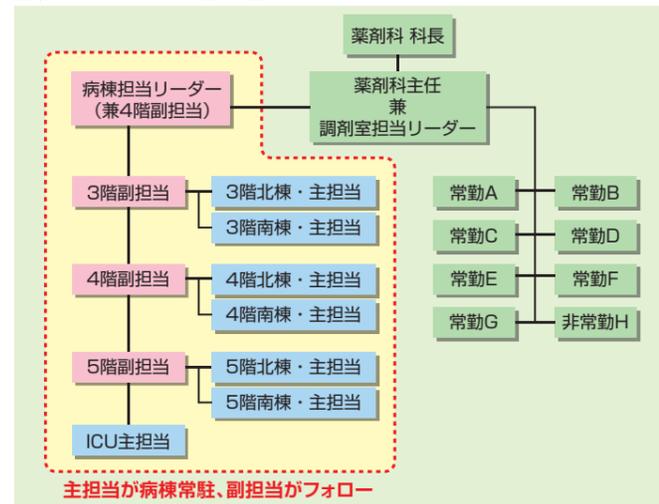
現在の病棟業務の体制をお教えてください。

野村 1フロア2病棟を3名の薬剤師がカバーして業務を遂行しています。3名で交代勤務体制を組むことで、常に専任の薬剤師を1病棟に1名配置でき、シームレスに対応できることがこの体制の利点です。特徴的なのは、各フロアの担当者を若手の主担当2名、中堅の副担当1名とし、副担当を業務の“扇の要”としている点です。名称こそ“副担当”ですが、経験を積んだ中堅薬剤師が業務全体を見渡してサポートする体制になっています。(図表1、図表2)

主担当を務められる若手の薬剤師さんは、病棟に上がるまでにどのような経験を積まれるのでしょうか。

黒沢 入局後、1年半ほど調剤室での経験を積んだ後、主担当を務めます。病棟業務は調剤室業務の延長線上にありますから、的確な病棟業務を行うためには、調剤室での仕事を十分に習得している必要が

図表1 薬剤科の組織図



病棟業務を担当する薬剤師は、ICU担当者を含め10名。薬剤科の薬剤師20名のうち、半数が病棟業務を担当している。提供:東住吉森本病院薬剤科

図表2 薬剤科の勤務シフト例

		日	月	火	水	木	金	土	日	月
調剤室		休		当直入	当直明		当直入	当直明	当直入	当直明
3階フロア	北棟・主担当	当直入	当直明	休	○	○	○	○	休	当直入
	南棟・主担当	休	○	○	○	当直入	当直明	休	休	○
	副担当	休	○	○	休	○	○	○	休	○
4階フロア	北棟・主担当	当直明	休	○	○	○	○	○	休	○
	南棟・主担当	日直	○	休	○	○	○	○	休	○
	副担当	休	○	○	当直入	当直明	休	休	休	休
5階フロア	北棟・主担当	休	○	○	○	休	休	当直入	当直明	休
	南棟・主担当	休	当直入	当直明	休	○	○	○	休	○
	副担当	休	○	○	○	○	○	○	休	○

土曜日でも平日と同様の勤務体制を組んでいるため、平日に公休をとることになる。3名でローテーションを組み、常に1病棟に1名を配置している。提供:東住吉森本病院薬剤科



薬剤科 科長 野村 剛久先生

あります。そこで新人薬剤師は、まず調剤室で調剤、混注業務や在庫管理など、病棟以外のあらゆる経験を積み、業務を支えるルールや本質をしっかりと身につけた上で、病棟を担当します。

病棟担当となる前に、病棟を見学したり、病棟担当者交代時の申し送りに同席する機会が数日間ありますが、実習期間は設けていません。オン・ザ・ジョブ・トレーニングを重視し、予測される注意点などを業務中に副担当から教えてもらいながら経験を積んでいきます。

各フロアの担当は、一定期間でローテーションされるのでしょうか。

野村 画一的な決まりはありません。状況に応じて異なりますが、1～2年でローテートするのが理想的だと考えています。副担当になるまでの経験年数も決めていませんが、主担当として概ね5年以上は実務を経験する必要があると思います。

2病棟3名体制になるまでの経過をお教えてください。

黒沢 当院の病棟業務は、1993年、医薬分業を全面的に開始し、院内処方から院外処方に切り替わったことを契機に始まりました。調剤業務に余裕が生まれたことから、「ベッドサイドに薬剤師の仕事があるはず」との当時の院長の後押しもあり、病棟に上がるようになったと聞いています。服薬指導を進めるとともに、定数配置薬の管理など病棟業務の幅を手探りで広げていき、1995年に1病棟1名体制を確立しました。更に病棟薬剤師が不在の日をつくらないように、2005年には2病棟3名体制へと変更しました。

私はこの年に入局し、新体制下で最初に病棟業務を担当した一人です。当初は苦労もありましたが、常駐することで副作用の防止や早期対応が行えたり、薬剤に関するインシデントを減らせるなど、患者さんのメリットを身にしみて感じる事ができ、非常に励みになりました。

II 病棟業務の実際

医薬品の副作用や有害事象など 情報の収集と提供が現在のテーマ

病棟業務における現在の方針やテーマをお教えてください。

野村 私が薬剤科に赴任した2011年8月、すでに病棟業務は医療安全をテーマとして大きな実績を



薬剤科 主任(調剤室担当リーダー) 黒沢 秀夫先生

上げていました。この基本路線を踏襲した上で、“医薬品の副作用や有害事象などの情報収集”と、“医療スタッフに対する医薬品の適正使用の推進”を今年度の目標として取り組んでいます。2012年度の診療報酬改定で設けられた「病棟薬剤業務実施加算」でも、その目的に“薬物療法の有効性・安全性の向上”が掲げられています。当薬剤科もこの精神に基づき、医療安全に重点を置いた取組みを進めています。

病棟で常に患者さんの側にいてこそ きめ細かな患者指導ができる

病棟業務の進め方や内容をお聞かせください。

佐古 私は現在、3階の副担当を務めています。3階は、整形外科・リウマチ科病棟と、脳神経外科・形成外科病棟があります。診療科によって手術の有無などの違いがあり、業務の進め方も多少異なりますが、基本的なルールは統一されています。以下、1日の主な業務を時系列でご紹介します(図表3)。

9:00~9:15

●夜間の指示確認、内服処方切れ日把握

これらの業務は看護師と協働で行い、薬剤師は主にその作業をチェックしています。

図表3 病棟薬剤師の1日の業務の流れ

時間帯	業務	場所
8:50~	朝礼(全薬剤師参加)	薬剤科
9:00~	夜間の指示確認、内服処方切れ日把握	病棟
9:15~	退院患者の対応(服薬指導等)	病棟
	新規入院患者の把握 入院患者への服薬指導 多職種からのコンサルテーション 処方薬の確認 診療録への記載 等	病棟
11:30~	休憩	薬剤科
12:30~	※と同じ	病棟
15:30~	全病棟薬剤師による進捗情報把握と問題の共有	DI室
16:00~	病棟定数配置薬等の管理状況を把握 →医薬品安全管理責任者(薬剤科 科長)へ報告	病棟
16:30~	全患者のカルテ指示の確認	病棟
17:00	病棟薬剤業務日誌の記載、業務終了	DI室

提供:東住吉森本病院薬剤科

9:15~15:30

●退院患者への対応(服薬指導等)

患者さんの入院中の経過を踏まえ、退院時処方薬のチェックを行います。持参薬を一時中断している場合は、退院時に再開されるかどうか医師に確認します。

退院時の服薬指導で最も重要なことは、医師の指示通りに服薬してもらうよう、きめ細かく情報を提供することです。日常の注意点をご家族に説明してご協力をお願いしたり、必要であれば「お薬カレンダー」をご案内します。

入院経過をみてきた薬剤師だからこそ、患者さんやご家族に手厚い情報提供ができるのだと思います。

●新規入院患者の把握

患者さんの常用薬を始めとした薬剤に関連する様々な情報を、患者さんとの初回面談や診療情報提供書、看護サマリーなどによって収集し、一覧にしてカルテに記載します。喘息治療用の吸入ステロイド薬や緑内障治療用の点眼薬など、持参し忘れがちな薬剤もありますので、既往歴にも十分に注意して初回面談を行います。

現病歴に対しては、検査値などを参照しながら入院までの服薬状況や食生活を聴き取ります。例えば心原性脳塞栓症で入院された患者さんのケースでは、入院前から予防的にワルファリンカリウムを服用していたものの、入院時のPT-INRが治療域にまで到達していませんでした。食生活を詳しく聞いたところ、納豆を日常的に食べていることが判明しました。私たちはPT-INRの推移を注意深くチェックするとともに、患者さんご家族には相互作用について伝えました。

このように、薬剤と原疾患との関係を詳細に探り、アセスメントするのも薬剤師の大切な任務だと考えています。

●多職種からのコンサルテーション

抗菌薬などの薬剤選択に関する質問や、腎機能に応じた投与量の変更、患者さんの服薬アドヒアランスに合わせた剤形変更に関する相談、TDMの依頼など、病棟では様々な相談や依頼を受けます。相談にはできる限り迅速に回答するとともに、必要に応じて剤形変更や投与量変更などの処方提案を行います。

理学療法士と患者さんのご家族から「錠剤では服用しづらいと訴えている」と相談された事例では、主治医と相談の上、薬剤の種類を減らすとともに錠剤を散剤に変更しました。更にその状況をご家族にも報告し、気になる点があればいつでも相談してほしいと伝えました。



薬剤師 佐古 守人先生

この事例のように、最適な薬物療法のために、多職種と協働し、継続的に患者さんに関われるのが病棟に常駐している薬剤師の強みです。

●処方薬の確認

調剤室から病棟に払い出されてきた薬剤の最終チェックを行います。各患者さんの病状や検査値などを把握し、薬剤減量の適否を検討したり、薬効が重複する薬剤の有無などをチェックするのも、病棟薬剤師の役割だと思います。

15:30~16:00

●全病棟薬剤師による進捗情報把握と問題の共有

全病棟の薬剤師がDI室に集合し、状況把握のためのミーティングを行います(写真)。入退院患者数や入退院に関わる業務の状況等を報告し、薬剤関連のインシデント・アクシデントや多職種からのコンサルテーションなどの情報を共有します。新人薬剤師の場合、業務が滞りがちになることがありますから、先輩薬剤師がアドバイスしたり、業務をサポートすることもあります。また、必要があれば調剤室やDI室の担当薬剤師も参加し、緊急性の高い医薬品情報などを伝達します。

写真

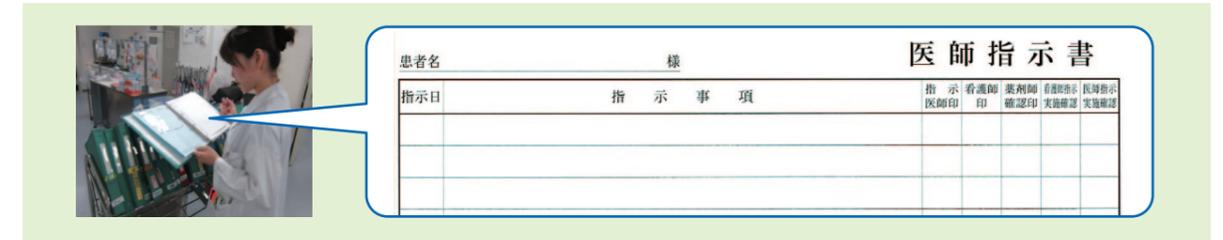


15時30分に全病棟薬剤師がDI室に集まり、状況報告を行う。
提供:東住吉森本病院薬剤科

●病棟定数配置薬等の管理状況を把握

病棟の定数配置薬の管理は基本的に看護師が実施しています。薬剤師はこれを業務手順書にのっとりチェック表を用いて確認します。チェック表は

図表4 全カルテに添付された医師指示書の確認



翌日の治療内容が記載された医師指示書。
病棟スタッフは内容を確認した上で、各自の欄に押印する。
提供:東住吉森本病院薬剤科

医薬品安全管理責任者(薬剤科科长)に毎日提出します。

●全患者のカルテ指示の確認

薬剤師は患者さんの治療の流れや状態を総合的に確認しながらカルテに添付してある医師指示書をチェックし、薬剤師欄に確認印を押印します(図表4)。記載内容に疑問点があれば迅速に医師に確認します。

薬剤科内の連携と、病棟スタッフ間の信頼関係が医療の安全・安心を支える

病棟業務では、どのような点に留意されていますか。

佐古 病棟ではスタッフから様々な依頼を受けますが、薬剤師でなければできない業務を優先し、単純作業などはできる限り引き受けないという判断も必要です。また、決められたことを的確に行うことは大切ですが、それだけで満足すべきではないと肝に銘じています。これまで薬剤師の業務だと考えられていなかった部分にニーズが隠れていることもあります。そのニーズを見つけて対応し、少しでも患者さんの利益につなげたいと考えています。

病棟業務を行うにあたって、薬剤科内での協働体制も大切ですね。

黒沢 私は病棟業務を6年経験し、現在は調剤室でリーダーを務めています。その立場からみて病棟と調剤室の連携は非常に重要だと感じています。薬剤を病棟に上げるタイミング一つで病棟業務全般が影響を受け、業務の遅延につながります。調剤室としては、迅速に薬剤を病棟に払い出すよう努めるだけでなく、病棟業務のなかで手助けできるものは支援していきたいと考えています。例えば処方薬の医師への確認や修正依頼、医師からの問い合わせへの対応などは、できる限り調剤室でも受け入れたいと思います。そのためにも、若手薬剤師を1日でも早くレベルアップさせることが目下の課題です。

III 現在の評価と今後の展望

業務の効率化を進めながら医療安全により積極的に関わっていききたい

最後に、今後の展望をお聞かせください。

佐古 新人薬剤師の手本となるよう励みながら、病棟薬剤師全体のレベルアップを図ることが現在の私の課題です。マンパワーに頼っている業務をスリム化し、薬剤師の職能をさらに活かせるよう、全員でスキルアップしていきたいと考えています。

黒沢 病棟スタッフが信頼し合い一丸となって医療安全を進める基盤が築き上げられてきたと実感しています。現在、処方提案力を始め病棟薬剤師の実力は確実に上がっています。患者さんの安全・安心のために、その力をフルに発揮できるよう調剤室もバックアップしていきたいと思っています。

野村 薬剤科スタッフは皆、士気が高く、目的意識をしっかりと持ってレベルの高いジェネラリストとして業務に取り組んでいます。病棟薬剤師には、繊細なアンテナを持って鋭敏に情報を拾い上げる能力が求められます。ジェネラリストとして様々なことに興味を持ち、その延長としてスペシャリストを目指すことが病棟薬剤師の理想像だと思います。

現在の課題は、IT化やシステム化、情報の一元化を進め、薬剤師が作業しやすい環境を整備することです。無理をして病棟業務を拡大しようとすると、医療安全という本質をかえって見失う恐れがあります。効率化を図りながら、薬剤の医療安全に薬剤師が100%関われるよう、着実に業務展開を進めていきたいと考えています。

医療法人橘会 東住吉森本病院の概要

〒546-0014
大阪府大阪市東住吉区鷹合3-2-66
院長:瓦林 孝彦
設立:1971年
病床数:329床
診療科:13科
薬剤科:20名(常勤19名、非常勤1名)
(平成24年9月現在)

